

人が、街が失われた2011年3月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

あの日から、  
未来へ

南相馬市立総合病院  
内科医  
坪倉正治氏



## 増大する不安コストの先に

表面が剥ぎ取られてむき出しになった土と、大量のウレコンパック（除染を行った後の廃棄物を溜めておく袋）の山。放射線量を下げたための除染事業は、大々的に市内全域で行われてきた。南相馬市ではほとんどの除染が終了し、昨年7月には旧避難区域だった小高地区の避難指示が解除され、ほぼ全域で人の居住が可能になった。それからもうそろそろ1年になる。

できた廃棄物の減容化対策や、さらに原発に近い地域にある中間貯蔵施設への搬入など、徐々に放射線から除染、除染からその廃棄物の処理へと問題の焦点は移動しつつある。結局、大量のウレコンパックの山が残ったこの除染とは何だったのだろうか。

除染作業は、さまざまな影響をこの地域にもたらした。医療に携わるわれわれとしては、作業員の健康問題対策は大きな課題だった。人口約5万人の都市に、5000人以上の作業員が流入したのだから、それは大変なインパクトである。

多くの作業員は一生懸命やってくれた。感謝したい。その一方で、全員が決してそうではないが、日雇いの人も多く、いわゆる仕事を求めて地域を転々とする人がおられ、そのような中に自身の体調管理に無関心な人もいた。詳しくは当院の澤野医師が発表した結果を参考にしたいが、糖尿病や血圧の管理が全くされておらず、致命的な心血管系の病気を発症されたり、明らかに末期がんの状況であるのに、病院に搬送されるまで全く気づかれていない人もいたりした。<sup>1,2</sup>

産業にとってマイナスばかりではもちろんなかった。飲み屋やホテルはいつも満員。市内のビジネスホテルは予約困難になり、以前は何かのプレハブだった建物にいつの間にかホテルの看板が掲げられるという光景は良く目にしたものである。地元の建設会社の知り合いはこういう。「売り上げは以前の数倍になりました。借金があったほとんどの会社が返し終えたと聞いています」。そして、続けた。「巨大な公共事業的ばらまきだった。ただ

その公共事業が縮小する今、次の5年で建設業がどう生き残るかは本気にならないとまずいことになる」と。一種のバブルである。

除染が一段落し、急激にそのような作業員の受診は減った。朝の彼らの出勤前のコンビニ大混雑も減った。彼らは次にどこに行ったのだろうか。東京オリンピックの準備だろうか。熊本だろうか。

結局、線量は下がったのか。先日相馬市の外部被ばくを評価した論文を発表した<sup>3</sup>。実際にデータを見ると、早い時期、具体的には震災2年以内に除染が行われている場合には、線量は下がっている。しかしそれ以降の除染ではほとんど線量は下がっていない。加えて、元々の線量が高い地域でなければ線量はあまり下がらない。ドライに言えば、除染自体が放射線被ばくによる健康問題を減弱する効果はほとんど持ち合わせていない。その一方で、「除染がされた後なので、子どもを思う存分遊ばせることができた」「除染されたので家に帰ることができます」という声もたくさん聞いた。除染はその引き替えに大量のゴミを生み、風景を変容させた。放射線量を下げるといふ命題にあまりにも固執した結果ではないだろうか。

ただ、除染自体の効果が本当にあったのか。もう少ししっかり今後のためにデータをまとめねばならないと思っている。ただ淡々と前に進むのみである。

1. Sawano T, Tsubokura M, Ozaki A, et al. Non-communicable diseases in decontamination workers in areas affected by the Fukushima nuclear disaster: a retrospective observational study. *BMJ Open* 2016; 6(12): e013885.
2. Sawano T, Tsubokura M, Leppold C, et al. Klebsiella Pneumoniae sepsis deteriorated by uncontrolled underlying disease in a decontamination worker in Fukushima, Japan. *J Occup Health* 2016; 58(3): 320-2.
3. Tsubokura M, Murakami M, Nomura S, et al. Individual external doses below the lowest reference level of 1 mSv per year five years after the 2011 Fukushima nuclear accident among all children in Soma City, Fukushima: A retrospective observational study. *PLoS one* 2017; 12(2): e0172305.